



さざんか

かとう学園 宗像市立河東中学校
学校通信第21号(R5. 9. 4)

2学期の明確な目標は定まっていますか。2学期いっぱいかけて何を頑張るか?どんな力をこの数か月でつけていくのか?目標の設定の仕方いかんで自分自身の伸び方もチームの成長も違ってきます。下の4人の部長の記事に刺激を受けましょう!

新人戦に向けて~部活動・クラブチームの決意表明 Part2



【 ソフトボール部 吉原 由來さん 】

こんにちは!ソフトボール部部長の吉原由來です。私たちソフトボール部は、9月末から10月にかけて行われる新人戦で筑前大会出場を目標に日々練習に取り組んでいます。私たちは、“常に笑顔・声を大きく・礼儀正しく”を徹底しています。また、明るく・元気でメリハリのあるチームを作っていきたいと思っています。なので、大きな声であいさつすることなどを頑張っていこうと思います。一生懸命頑張るのでこれからも応援よろしくお願いします。

【 男子剣道部 林 泰地さん 】

こんにちは。男子剣道部の新キャプテンになりました林泰地です。男子剣道部は、8年生6人、7年生1人の計7人で日々稽古に取り組んでいます。男子剣道部は、新人戦県大会出場を目標にしています。今年夏の中体連で達成できなかった目標を達成するために、日々の感謝を忘れず、チーム一丸となってどんなことにも挑戦していこうと思います。また、顧問の野田先生、綿田先生、鳥井先生、外部コーチの木藤先生のご指導をしっかり受け止めて新人戦に向けて努力していきます。最後までチーム一丸となって頑張っていくので、応援よろしくお願いします。



【 サッカー部 江崎 優真さん 】

こんにちは! サッカー部キャプテンの江崎優真です。僕たちサッカー部は、7年生12名、8年生7名の計19名で日々の練習を楽しみながらもお互いに切磋琢磨しながら取り組んでいます。僕たちの目標は、10月に行われる新人戦で筑前大会に進出することです。現在、この目標を達成するために、チーム内でのコミュニケーションを活発にしながら、楽しくも真剣に励んでいます。現在のサッカー部は、経験者が少なく課題も多いのですが、良い雰囲気練習ができていますので、もっとチームが盛り上がるように日々声掛けをしていきたいです。



【 吹奏楽部 木村 友さん 】

こんにちは。吹奏楽部部長の木村友です。私たち吹奏楽部の目標は、吹奏楽コンクールで地区大会金賞!支部大会金賞!そして、県大会に出場することです。その目標を達成するために、一日一日の練習をより大切に、ロングトーンなどの基礎練習から、一人一人が自分の中で一番良い音を出せるように頑張ります。吹奏楽部はコンクールのほかにも、学校行事や地域のお祭りでも活躍の場がたくさんあります。その際には、河東中の明るく・元気のよいサウンドを響かせ、聴いている人を笑顔にできるように頑張ります。これからも応援よろしくお願いします。



稲尾和久さんが不世出の投手に成長した方法 ～「神様、仏様、稲尾様」と呼ばれるようになった原点～

大谷翔平選手のメジャーでの快進撃が止まりません。福岡にも昔、大谷選手のような大投手がいました。

昭和という時代に福岡には「西鉄ライオンズ」という日本一強いプロ野球球団がありました。そのチームの大黒柱で、この人が登板すれば必ず勝つという伝説を残し、「神様、仏様、稲尾様」とうたわれたのが西鉄ライオンズの投手、稲尾和久さんです。（※西武ではありません、西鉄です）

今日の話はちょっとレトロな古い話で、地域のお年寄りの皆様は懐かしい思い出をよみがえらせながら読んでください。保護者や先生方は仕事やプロフェッショナルとしてのヒントを見つけてください。生徒のみなさんは、自分を成長させるカギを探してほしいと思います。

稲尾和久さんは、昭和30年代、西鉄黄金時代の中心選手として活躍し3年連続日本一に貢献しました。1シーズン42勝という今では考えられない記録があります。特に、昭和33年の日本シリーズでは、チームが3連敗したあとで稲尾さんがなんと4連投して、見事4連勝して日本一を達成したため、「鉄腕、稲尾」や「神様、仏様、稲尾様」と言われるようになりました。

さて、稲尾さんは1937年大分県別府市に7人兄弟の末っ子として生まれました。漁師の家に育ち、少年時代は稲尾さんも船にのって手伝いました。櫓を漕いで腕力を鍛え、足を踏ん張り波を受け止めて下半身を鍛えました。後年「薄い板一枚隔てて、下は海。いつ命を落とすかわからない小舟に乗る毎日だったが、おかげでマウンドでも動じない度胸がついた」と語っています。

高校3年生の夏の甲子園大分県予選の準決勝で敗れますが、スカウトの目に留まり、福岡市の平和台球場を本拠地にしていた西鉄ライオンズに入団します。

この年ライオンズには、3人の新人がいました。日が経つにつれ、稲尾さんはあとの二人と自分の扱いが違うことに次第に気づいていきます。一人はコーチがついてブルペンでピッチングの練習。もう一人もバッティングの練習をしている。しかし稲尾さんは打撃練習投手ばかりでみんなから「手動練習機」と呼ばれてばかりにされました。

普通ならここで心が折れて投げやりになるところです。ところが、成長する人は現実を受け止め、その時その場で自分の出来ることに集中します。伸びていく人はあらゆる条件を生かして伸びていきます。

稲尾さんは、黙々と打撃投手を務め続け、頭を使い続けました。そして、ある時、いつものようにバッティングピッチャーとして汗を流しながら、あることに気づきます。

「はあ、なるほど。バッターはストライクばかり投げたのではバットを振り続けられないから嫌がるな。じゃあ、4球に1球ボールを混ぜてみよう。」…そうすると、バッターは喜ぶな!

それから、4球に1球ボールを投げるようになりますが、さらに工夫を進めます。1日400球投げるバッティングピッチャーとしてこう考えます。

「1日400球投げる中で、100球は自分の練習のために使おう!ボールになる球で、高め・低め・アウトコース・インコースに1球入魂で投げ込もう!」

こうして、稲尾さんは無類の絶妙なコントロールを身に付けていきました。

最後に、稲尾さんが晩年引退後に語った言葉を紹介します。これは、野球に限らずあらゆるスポーツや芸術の上達に関わる本質をついた言葉ではないでしょうか。心の大切さ、心技体の先頭に心を置いた日本の精神の表れだと思います。

「どんなにすごい体力を持っていても、どんなに素晴らしい技術を持っていても、それらを活かしているのは心理的なものとか精神的なものなんです。」

